明治の佐伯三青年　31

龍渓・鳴鶴・鶴谷

御手洗　一　而

（賛助会員・川越市小堤）

内閣制度の創設　1

年が明けて、明治十八年の一月から、藤田は尾崎庸夫と共訳の形で『繫思談』を報知紙上に紹介した。

『繫思談』とは、リットン卿が著した『ケネルム・チリングリイ』のことで、藤田が断っているように、ケネルムのKとチリングルイの頭文字Cを取って『繫思談』と、英音に近い漢字を当てたのである。但しこの書は、藤田が直接訳したものではなく、当時帝大生であった朝比奈知泉が訳したものを、藤田が校正したものであった。

前にシェークスピアを紹介した藤田は、この頃翻訳ものに異様な好奇心を示している。藤田のみならず、維新後の論客がおしなべて著述に眼を向けたのも仕方がなかった。一つには政党の弾圧により、主だった政党であった帝政党や自由党は解散し、片方では、ドイツから帰国した伊藤博文は、国会開設へ向けて着々と準備は進めていたが、憲法取調局を元老院内に設け、全く外部との接触を避けたため、各新聞社も豐桟敷におかれていた。

こんな時に洋行出来た矢野は幸運であった。昨年来選挙法改正の議会討議をその眼で見、この年には、昨年から改正された「人民代表条例」による新選挙を取材する機会に恵まれた。新しく選挙権を得た労働者階級の活動ぶりや、ポスター・機関新聞の論調まで学ぶべきことは多かった。そして立候補者の演説会場へ出かけると、「東洋の記者」・「東洋の紳士」として上席へ案内され、実際の選挙戦を肌で感じることが出来たのは、日本では味わえない体験であった。特に与党と野党との駆引は、国会活動の副産物として興味のあるものであった。

こうして矢野は、一日一日の目標を立て、都市から村へ、あらゆる地域あらゆる階級へ身を投じ、我を忘れて駆け廻った。そして、英京ロンドンでの見聞が一段落すると、矢野にはもう一つの夢があった。それは、『経国美談』で舞台となった、ギリシャ・ローマの史跡を自分の足で訪ねることであった。更に本業である新聞の経営

も研究課題であった。矢野は春から夏にかけて、これらヨーロッパ大陸探訪の日程に頭を痛めていた。

報知には、月を追って、矢野からのヨーロッパ通信が入っていた。この頃の洋行は、若者にとって単なる流行ではなく、出世の登龍門であった。それだけに、若者達は鵜の目鷹の目で洋行の機会を狙っていた。藤田が矢野の『経国美談』に刺戟を受けないわけはなかった。だが藤田には、同じ著述にしても、別の願望もあった。それは、『経国美談』の舞台が西洋であるなら、これを東洋に置き換えるとどのようになるかという事であった。つまり、西洋の民権思想と東洋の民権思想との対比を明らかにしたかったのである。藤田は佐伯にいた頃、まだ膝小僧にすり傷の絶えなかった幼年時代に、楠私塾で「民は国の本である」という孟子論の一説を教わったことがある。矢野が藤田を知るきっかけになったのも、当時林茂吉といった少年の書いた漢詩であったが、藤田の底流に流れているのは、一貫してこの孟子の民権論であった。それからの藤田は民権運動の論客として、一方の旗頭まで台頭したが、ここにきて、再び彼の血を湧き立たせるものがあった。藤田をして何かを書かせたい衝動にからせたのは、政府の弾圧のせいかもしれない。矢野の先例かもしれないが、所詮藤田の心の中に生き続けていたものであろう。藤田はこの秋から起稿にとりかゝった。これが『済民偉業録』である。

藤田の構想は、時代を明朝の末期宗粛皇帝の頃を舞台とし、硬骨の延吏揚継の子揚雲を主人公にしている。揚雲は父親の勧める官吏登用試験にも応ぜず、自らが信じる孟子の済民の大業を理想とし、野にあってその大業に突き進む筋書になっている。この揚雲こそ若き日の茂吉を髣髴とさせるものがある。藤田は終日構想を練っては執筆に余念がなかったが、政府はこの年の暮れも迫った二十二日に突如内閣制度の新設を発表した。

国会開設を目前に控え、政務が繁雑になるこの頃では憲政の運用に当って、今の太政官制度では不便を感じるため、太政官諸職の代りに内閣を新設し、各省長官に責任を分担させ、これを統轄するのに一人の総理大臣を置くというものである。こうして、第一次伊藤内閣が発足した。

第一次伊藤内閣

内閣総理大臣兼宮内大臣　伯爵　伊藤博文
外務大臣　同　井上　馨
内務大臣　同　山県有朋
大蔵大臣　同　松方正義
陸軍大臣　同　大山　巌
海軍大臣　同　西郷従道
司法大臣　同　山田顕義
文部大臣　子爵　森　有礼
農商務大臣　同　谷　干城
逓信大臣　同　榎本武揚

この諸大臣の顔ぶれを見ると、伊藤・井上・山県・山田は長州、松方・大山・西郷・森は薩州、谷は土佐、榎本は幕臣で、薩長の藩閥内閣であることは、誰の眼にも明らかであった。この内閣の組織と共に警視総監にはあの横暴知事三島通庸を登用し、新たに元老院議官を設けたり、文官任用の法律を定めるなど、一大改革を試みたが、この顔ぶれを見て、喧々ごうごうたる非難が湧き起った。

翌日、報知社には見知らぬ論客まで集まって騒々しくなった。

「見たか藤田。伊藤も思い切ったことをやる。制度の変革は仕方がないが、こう見せつけられると腹が立つのう」

加藤政之助であった。

「薩長偏重は覚悟していたが、これでは治まるまい」

藤田は口では治まらぬと言ったが、すでに悟り切ったような顔をしていた。

「大隈さんが何と言うかのう」

「これでは一揆でも起さぬと、腹の虫がおさまらぬのう」

階下から怒声が聞こえた。

「この制度が落ちつくまでには、まだまだいろいろな事があるが、ここが気になるのう」

藤田はこう言って、加藤にペンで印をつけて知らせた。

「総理大臣か」

「伊藤さんが総理大臣をやるのはいいが、宮内大臣まで兼務となると、一人で天皇の勅裁まで仰ぎかねん。こりゃ大問題じゃ」

「十四年の政変の如き変事が一人の権力で濫用されてはかなわぬのう」

「この分だと憲法まで疑いたくなる。国の基本法を穏密

裡に勝手に決めておいて、さあ公布じゃ国中が騒ぎ出すわい」

藤田や加藤の心配もわかるが、初めての制度だけあって、各人各様の思惑が、噂が噂を呼んで瞬く間に全国に広がった。

この頃から、政府の弾圧によって、暫く東京を離れていた志士達が、再び上京するようになっていた。全国的な非難の中には、外交問題もその一つであった。開国以来の不平等条約の改正は国家の急務であったが、列国が日本をまだ未開の野蛮国として軽視する裏には、国民の生活状態を改める必要があるとして、井上外務大臣は極端なる欧化政策を急いだ。和服を廃して洋服を着ること牛乳や肉食を勧める等、国民の生活改善から外人の歓心を集めようとした。鹿鳴館の新設も、社交場としての目的はわからないでもなかったが、連日の舞踏会が、放歌乱舞、博奕場と化したり、痴話喧嘩まで囁かれるに至っては、有識者の顰蹙を買うばかりか、大衆の反抗心をかき立てるだけであった。

明治十八年はこういう状態の中で暮れたが、年が明けて十一日、大隈の手足となって活躍した小野梓が、わずか三十五歳の若さで生涯の幕を閉じた。藤田は便船を待って、国内の様子を矢野に知らせることにした。

一方、矢野は、かねてからの計画通りギリシャ・ローマの史跡探訪を兼ね、ヨーロッパ行脚に出掛けるため、再度フランスへ渡り、温暖の地を求めてイタリアへ直行したが、ローマに滞在中病に犯されて寝こんでしまった矢野の心細さはいうまでもなかったが、幸いにも西郷の甥にあたる市来政方が、公使館の書記官として在勤中で矢野は市来の下宿の一室で保養することができた。又、後に陸軍大臣となる石本新六も、この時頃度公使館付武官として在勤中で、彼も絶えず矢野を見舞い世話をやいた。

矢野の病気は、彼等の世話で無事快方に向かったが、単身での長旅は無謀であることを知り、史跡を訪ねたあと、オーストリアからスイスを経てドイツを廻る計画は中止せざるを得なくなった。矢野はフランスへ引返し、一旦ロンドンへ帰ることにした。

矢野の帰ったロンドンは、すっかり春になっていた。ロンドンに腰をすえた矢野は、今度は本業である新聞事

業の調査にとりかかった。当時ロンドン市中の新聞社はすでにモノタイプのような印刷機械を使用していたが、これを直ぐ日本の漢字印刷に応用するのは無理であった。その代り、印刷にガスエンジンを使用する方法は、帰国後すぐにも採用すべきだとして、カタログの蒐集に余念がなかった。

その矢先に、弟の武雄と教え子であった森田思軒が、渡英して来た。二人は矢野の下宿に転がりこみ、三菱の社員であった加藤高明も度々矢野を訪れ、矢野の下宿は急に日本人の集会所となった。武雄や思軒とは三年ぶりの再会であったが、武雄はとにかく藤田の手紙を手渡した。

「なんと。小野梓が死んだのか」

矢野は驚きを隠せなかったが、内閣の新設には頷いていた。

「薩長閥と総理大臣の権限について、国中が大騒ぎになっています」

森田がつけ加えた。

「英国の議会政治を見ても、内閣の新設は急がねばならぬが、こりゃちとひど過ぎるのう。変革の過渡期は、ある程度の独裁は許されるかもしれぬが、これでは国内が治まるまい」

矢野はこう言って、グラッドストンの首相ぶりと伊藤を対比して連想したが、伊藤の政策からみて、ドイツ式の官僚政治と武断政治を信奉する、伊藤の考え方がわからぬではなかった。

「英国の議会制度をものにするには、時間がかゝりすぎるかのう」

矢野は自分に言いきかせるようだった。

「何れにしてももう一荒れあるか」

矢野は呟いた。

「われ等も議会をこの眼で見とうござる」

森田の提案に矢野は頷いていたが、

「百聞は一見にしかずというが、いろいろなものを見るがよい。それから武雄には紀行記事を頼むわい。報知の連載はどうなっているかな。珍しいから読者も喜ぶであろう」

と、矢野は報知の売れ行きを心配しながら自信満々であった。

矢野はロンドンに着いてから、『周遊雑記』として、

見たもの聞いたものの記事を送り、報知に連載していた。
「それが大変な評判でして、すでに製本の作業が進んでいます」
「そうであろう。井の中の蛙大海を知らずでは通用しなくなった」
矢野はこう言って、雑記の整理を武雄に依頼した。
「それから帰国も急がねばならぬが、ドイツを一度だけ見ておく必要がある。先達ってはそのつもりで大陸へ渡ったが、ローマで病気になってのう、皆に迷惑をかけた思軒がいると心強いわい。もう一度計画を練り直すか」
矢野の頭には、次から次に、あくまでも新知識の吸収に強慾であった。

この頃、改進党の幹部達は、連日額をつき合わせては協議を重ねていた。
「烏合の衆みたいに、やじうまだけで政府を非難してみたところで、井戸端会議と同じじゃ」
業をにやすのは尾崎であった。
「その通りじゃ。こうと決めたら行動を起すまでじゃ」
行動派の沼間であった。
「党の大会でもやるか。帝政党なく、自由党なし。今こそ改進党の存在を知らせるべし」
肥塚龍であった。
「何を議題にする。そこが肝心だが、果して政府がどう出るかのう」
島田三郎は議題を決めかねていた。
「第一に言論集会の自由、次に地方自治だが、危いぞ」
藤田の提案は皆の本音ではあるが、最後の「危いぞ」に心配が集約されていた。
「それがいい。建議の決議を諮ることにすれば、問題はあるまい」
箕浦の意見に皆は賛成した。
「その通り。政府への要望書にすれば、まさか政府も引っ張るまい」
沼間の一言でこの場の協議は一決した。
こうして、四月四日、改進党は党大会を井生村楼に開き、地方自治・言論集会の自由二件につき、政府に建議することを決議した。
これを知った政府は苦り切っていたが、解散した筈の自由党員も裏で密かに動き出していた。そして、島田三

郎は東京府にも改進党総代として建白書を呈出した。この動きに対して、政府は音なしの構えで静観していたが伊藤の御用新聞ともいうべき東京日々新聞が再び報知に毒づき、両新聞社の間で盛んに論争が行われるようになった。政府にしてみれば、東京日々の政府に対する政策の評価は有難かったが、この論争の火種が、かえって鎮静していた不満分子の憤慨を誘い、寝た子を起すはめになって、再び波紋が全国に広がっていった。

こんな状況を知らない矢野は、初夏の風に誘われるように、森田を連れて三度フランスへ渡り、ドイツへの旅に出た。この時の矢野は、滞在期間の短かかったせいもあるが、余り政治的な動きはしていない。農園を視察したり、ライン川に沿って民情にふれ、ベルリン入りするが、独仏戦争に見事大勝してドイツ帝国統一の大業を成就した王朝を目の前にして、鉄血宰相ビスマルクの手腕を肌で感じたことであろう。そして総理大臣伊藤は、グラッドストン型よりもビスマルク型に近いと思った。果して日本のとるべき道はいずれの制度を選ぶべきか、もう少し時間が欲しかったに違いないが、とにかく目的だけは果してロンドンに引き返した。

ロンドンには、逐次日本の状況が入っていた。党大会の決議などを知らされると、そろそろ帰国の時期であることを悟り、三年ぶりに帰国の決意をした。矢野はベルリンから帰ってから、森田や弟と手分けして新聞研究の資料を集め、九月になって、森田や弟と一緒に米国廻りで帰国の途についた。ニューヨークに暫く滞在し、シカゴからサンフランシスコに出て横浜への航路をとった。太平洋の洋々たるうねりが、日本の将来を占うように、どこまでも続く多事多難を思わせたが、三年ぶりに見る日本は、そこそこに欧米化の風潮は見られるものの、英国で選挙戦を見てきた矢野には、国全体の無活力や特に政治的意識の沈滞が気がかりであった。事実、矢野の留守の間、政府の弾圧にたえかねて、政党は解散し、民権運動もすっかり影をひそめていた。矢野は旅の疲れを癒す間もなく、手をつけねばならぬ仕事が待ちうけていた。

（この項次号に続く）